

1920年代の浅草における大衆文化

— 1920年代の日本の大衆文化と 浅草の役割 —

杉山千鶴

〔研究目的〕

1920年代という時期は、あらゆる分野において世界的な同時代性が認められる。特に軽演劇に関しては、ロシアの蝙蝠座の隆盛と欧米各地で上演された類似のショー、ドイツはベルリンのキャバレー全盛などが見られ、日本では浅草オペラから浅草レビューへの変遷がこれに該当する。本研究ではこの変遷に着眼し、1920年代の日本において軽演劇が浅草を中心に隆盛したという事実をもとに、浅草が大衆文化の中心地となりえた要因を探るものである。

〔研究方法〕

文献、新聞・雑誌などの資料を中心に、関係者へのインタビューを参考とした。なお本研究においては海野弘¹⁾に従い、1920年代を1918(大7)年から1932(昭7)年までとする。

〔結果及び考察〕

1. 1920年代の日本

1920年代の日本は、社会的には相次ぐ不況により社会不安が醸成され、また1917(大6)年のロシア革命の影響を受けマルクス主義が流行した。文化的には「日本モダニズム」という、欧米の影響を受けた近代化があらゆる分野に認められ、エロ・グロ・ナンセンスの3語に象徴される享乐的で頹廢的な風潮が蔓延した他、大衆文化が成立している²⁾。1920年代において大衆は、常に生活の不安に怯え現実逃避を図る傾向があり、刹那的で、刺激や官能のみを求めていたのである。

2. 都市・浅草

(1) 歴史的変遷

浅草は浅草寺の境内地にあり、江戸時代から参詣客で賑わっていた。他の寺院境内地と同様、浅草寺境内の奥山にも見世物などの興行街が形成されていた。1873(明6)年1月太政官布告により東京市内に浅草公園など5公園が制定され、1876(明9)年11月浅草公園の収入を他の4公園の経営費にも充てることが承認され、公園地拡張のため火除地が浅草公園に編入された。1884(明17)年1月浅草公園は一～六区に区画化された。六区(旧火除地)は興行・遊覧場・飲食店の集中する

特殊地域に定められ、さらに1～4号地に区分され、3・4号地で見世物興行が許可された。この後公園内の整理として、五区(旧奥山)の見世物小屋などが防火上危険視され六区に移転した。1885(明18)年には六区全体で7割の商店街店舗が開業したが、1・2号地はさびれていた。このため3・4号地の見世物興行による盛況に触発され同年5月1号地、翌1886(明19)年3月2号地の営業制限が撤廃された。これにより六区全域が娯楽興行街に性格づけられたのである。六区が公園経営の財源地としての浅草公園拡張と奥山の興行小屋の移転により成立したという特殊性は、以後の六区を大衆文化の中心地としたと考えられる。かくして1886(明19)年5月浅草公園は開園した。以後浅草寺と東京府の間で旧境内地の所有権が争われたが、1947(昭22)年4月浅草公園の廃止が決定、1951(昭26)年10月浅草公園は公園地から解除され、浅草寺の境内地に戻った。浅草公園は現存しないが、六区興行街の名残りは今もなお窺われる。

(2) 1920年代の浅草

1920年代の浅草では、活動写真、新派劇、安来節、曾我廼家劇、歌舞伎、女義太夫、剣劇、浪曲、浅草オペラ、浅草レビューなどの大衆文化が絶えず流行・衰退を繰り返していた。エロ・グロ・ナンセンスの風潮を反映した刺激的・官能的なもの、アナクロニズム(時代錯誤)を感じさせるものなど多種多様であった。観客は本所・深川の工場街の都市雇用者層、学生やサラリーマンなどの知識層、浅草の職人・店員・奉公人が主であり、女性は少なかった。年齢層は幅広く、大衆文化と同様多種多様な職業・年齢層の観客が浅草に集まった。1927(昭2)年12月浅草——上野間に地下鉄が開通、1931(昭6)年5月東武電車が浅草に乗り入れると、遠隔地からの来街者も増加した。おそらく大衆は日常の労働の慰めや憂さ晴らしに、また不況・社会不安という現実からの逃避のために意味も無く楽しめる刺激や官能を求め、それらを浅草の大衆文化に見出したと考えられる。特に地方出身者は従来の土着的感覚と上京後モダニズムの洗礼を受けて身についたモダン感覚を併せ持つという、浅草の大衆文化との共通点を有していた。1923(大12)年9月1日の関東大震災以後、大衆文化の中心地は浅草から丸の内・銀座へと移行していったが、1920年代の間は浅草が大衆文化の中心地だったと思われる。

インタビューより得た1920年代の浅草像は以下の通りである。

A. 石井八重氏

1917(大6)年10月夫の石井漢と共に浅草オペラに参加、1922(大11)年12月石井の渡欧まで浅

草に居住。物価が安く大衆的な町であった。

B. 舞踊評論家 村松道弥氏

1918(大7)年友人に誘われての浅草オペラ見物以来、敗戦まで浅草に通った。浅草は芸術的なものは失敗する大衆演劇の地であった。

C. 風俗漫談家 坂野比呂志氏

1929(昭4)年田谷力三に師事して以来現在も浅草を基盤に活動。浅草は、土地と店が芸人を育てる所であった。

1920年代の浅草では多様な大衆文化の興行を多様な大衆が観ており、大衆は大衆文化に対し芸術ではなく刺激と官能を求めていることが推察される。

3. 浅草六区における大衆文化の変遷

(1) 1910年代

本研究においては1920年代と規定した以前の10年間、即ち1908(明41)年から1917(大6)年を1910年代とする。1903(明36)年10月電気館が活動写真常設館に転向、以後浅草六区は常設館が続出し、1910年代は活動写真の隆盛期となり、奥山名残りの見世物は衰退していった。1910年代末期には女義太夫がドースル連という学生の支持を受け盛んになった。

(2) 1920年代

活動写真はトーキーへの移行直前の、無声映画の全盛期を迎えた。軽演劇では浅草オペラが始まるが、関東大震災以後壊滅、その残党が映画館のアトラクションへ、さらに浅草レビューへ流れた³⁾。震災後は立ち回りを中心とした剣劇が始まり、従来にないスリルとスピードで大衆を引き付け、全盛期を迎えた。安来節も同じ頃、農村的エロチシズムをアピールして盛んになったが、昭和に入り衰退した。

(3) 1930年代

本研究においては1920年代と規定した以後の10年間、即ち1933(昭8)年から1942(昭17)年を1930年代とする。活動写真は遂にトーキー時代に突入、優秀なトーキーが数多く製作されたが、一方で活動弁士の失業問題が生じた。軽演劇はエノケン(榎本健一)・ロッパ(古川緑波)時代を迎えたが、両者が東宝入りし浅草を去ると群小劇団が乱立し、衰退していった。剣劇は全盛期が続いており、これから派生した女剣劇も全盛期を迎えた。

4. 1920年代の日本の大衆文化に果たす

浅草の役割

浅草に集まる大衆は、1920年代の不況と社会不安の中で心の憂さ晴らしに浅草を訪れ、意味も無

く楽しめ欲求を満たしてくれる大衆文化に熱中した。保守的で時代遅れ、大胆・正直・率直な大衆は、プチブル的な先入観念には全く束縛されない独自の価値観を有していたため、大衆文化を本能的に評価できる感覚が備わっていたと思われる。自己の感覚に基づき、面白いものを容認しつまらないと思うものは却下したのである。これにより大衆文化の流行と衰退が繰り返され、大衆文化の提供者が次々と登場するため浅草の大衆文化は常に流動しており、またその内容も常にトップをいくものとなったと思われる。一方大衆文化の提供者にとっては、浅草の大衆に容認される大衆文化は内容・役者など全てがあらゆる職業・年齢層に容認される、即ち日本全国のどこにおいても“当たる”ことを意味していた。そのためにまず浅草で興行を試みたのであり、だからこそ浅草の大衆文化は常に新しかったのである。

以上の点から1920年代の浅草は、大衆文化の登龍門的存在であり、且つ興行上のバロメーターであったと推察される。

- 1) 海野弘「モダン都市東京」中央公論社 1983 p. 11
- 2)・3) 杉山千鶴「1920年代の浅草における大衆文化 -浅草オペラから浅草レビューへの変遷-」舞踊学11号別冊 pp. 24 - 25
- 台東区役所「台東区史」上・下巻 台東区役所 1955
- 台東区役所「台東区史・社会文化編」台東区役所 1966
- 台東区文化財専門委員会 台東区文化財調査報告書第5集「浅草六区」台東区教育委員会 1987
- 浅草観光連盟 増補改訂「浅草細見」浅草観光連盟 1976
- 高見順「浅草」英宝社 1955
- 石川弘義「娯楽の戦前史」東書選書 1981
- 添田唾蟬坊「浅草底流記」刀水書房 1930
- 今和次郎「新版大東京案内」批評社 1933
- 都新聞 1918(大7)年1月1日～
1932(昭7)年12月31日
- 上野・浅草新聞 1931(昭6)年8月1日～
1932(昭7)年12月1日
- 演芸画報 1918(大7)年第1号～
1932(昭7)年第12号

表一 1910 ～ 1930 年代の日本と浅草

